平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！

市政報告はこちらをご参照下さい ▶

■ Report（防衛新時代とは）

1　講演概要

（1）日　時
　２０２５年2月１８日（火）
　１６：００～１７：００
（2）場　所
　フォルトーナ
（3）講演内容
　「防衛新時代とは」
（4）講　師
　陸上自衛隊弘前駐屯地指令
　兼　第３９普通科連隊長１等陸佐
　萱沼　文洋　様
（5）主催者
　公益社団法人弘前法人会

2　目　的

参加の目的は、ロシアによるウクライナ侵攻や北朝鮮の核・ミサイル開発、中国による台湾情勢の緊迫化など、日本周辺における軍事的脅威や威圧的な動きが一層強まる中で、我が国がこれらにどのように対応しているのか、そして日本の安全は確保されているのかを正しく理解するためであった。
特に、報道だけでは見えにくい実際の安全保障の考え方や防衛の現状について、現場の視点から具体的に学びたいとの問題意識を持ち、本講演に参加した。

3　内　容（要　約）

（0）防衛新時代とは

本講演では、現代の安全保障環境の変化と、それに対応する日本の防衛のあり方について、「防衛新時代」という観点から説明がなされた。自衛官自らが国防について体系的に語る機会は多くなく、その意味でも本講演は極めて示唆に富むものであった。

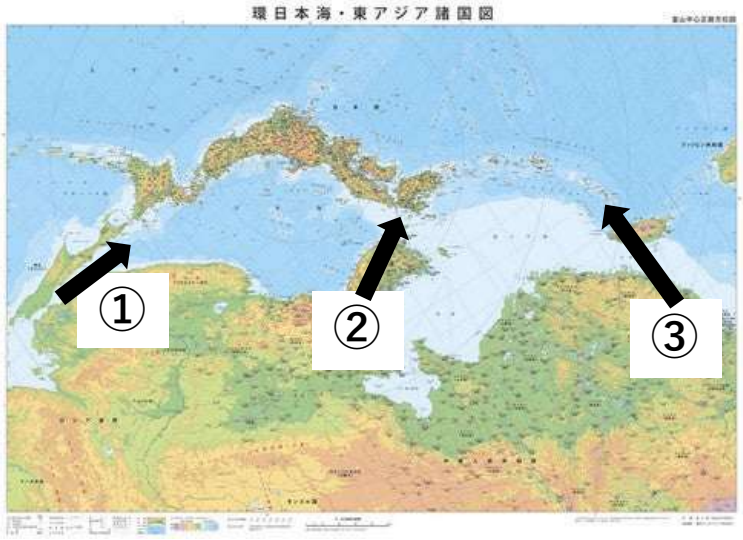
（1）新時代の安全保障環境

現在の安全保障環境は「最も新しい段階」に入り、従来とは異なる複雑な脅威に直面している。その基本的な考え方として、脅威は以下の式で示される。

$$\text{脅　威} = \frac{\text{敵国の能力（質・量）} \times \text{意志}}{\text{自国の防衛力}}$$

現在、脅威が増大している主因は、「**敵国の能力と意志」が急速に高まっている**ためである。特に日本に対しては、大陸側から以下の三つのルートで影響が及ぶとされる。

①　ロシア（サハリン・樺太ルート）
②　北朝鮮（朝鮮半島ルート）
③　中　国（台湾ルート）※最も重視される



（2）周辺三国の動向

① ロシア

ロシアは**「防衛上の強い懸念」**とされるが、日本への直接的な侵攻意思は比較的小さいと分析される。その背景には以下がある。

・北方領土の保持意志（返還意思なし）
・オホーツク海における核弾頭搭載の原子力潜水艦の運用（バスチオン戦略）
・西側諸国と領土を接したくない

② 北朝鮮

北朝鮮は**「従前より一層重大かつ差し迫った脅威」**である。

・弾道ミサイル能力の高度化
・不規則な軌道や高速落下により迎撃が困難化

➢日本の迎撃システムは高性能であるが、技術進化により対応が難しくなっている。

③ 中　国

中国は**「戦略的な挑戦」**と位置付けられる。

・軍事だけでなく、外交・経済・技術・情報など多面的な圧力
・長期的・計画的に環境を整えた上で行動する特徴

➢台湾問題はその象徴であり、「2027年までに侵攻の可能性」が指摘されている。

（3）三国間の関係

三国は相互に補完関係を形成している。

・ロシア⇔中　国：経済・外交面での相互支援
・ロシア⇔北朝鮮：軍事技術と人的・物的支援交換
・中　国⇔北朝鮮：体制維持と地政学的緩衝地帯

この連携が、日本を取り巻く脅威をさらに複雑化させている。

平川市議会議員

葛西はやと

みんなが笑って暮らせる社会にしたい！

市政報告はこちらをご参照下さい ▶

■ Report（防衛新時代とは）

（４）日本の防衛政策の転換

こうした環境変化を受け、日本は**「安全保障関連３文書」を改定**し、防衛力の抜本的強化に踏み出した。

- 国家安全保障戦略（経済・技術・情報を含む）
- 国家防衛戦略（防衛目標・多次元統合防衛力）
- 防衛力整備計画

➢**背景には、「米国が無条件で守る時代の終焉」がある。**

（５）経済安全保障の重要性

現代の安全保障は軍事だけでなく、**経済分野にも拡大**している。

（政府の主な施策）
- 外為法改正　・土地利用規制法
- 経済安全保障推進法

（対象分野）
- サプライチェーン　・先端技術　・インフラ
- サイバーセキュリティ

➢**自治体・企業においてもBCP（事業継続計画）の策定が求められている。**

（６）抑止力の本質

抑止力は次の式で表される。

抑止力 ＝ 能力（質・量） × 意志 × 信頼度

ここで重要なのは以下の点である。

- 意　志：国民が自衛隊を信頼すること
- 信頼度：実際に力を行使する意思を相手が信じること

つまり、軍事力だけでなく**「国民意識」が抑止力の中核**となる。

（７）地域防衛と青森の役割

青森県は重要な防衛拠点である。

- 原子力施設防護
- 車力ミサイル基地
- 三沢空軍基地
- 各駐屯地（青森・弘前・八戸）

現状では**シェルター整備**は進んでいないが、今後の課題として議論されている←南沙諸島が優先！
また、弘前駐屯地は「逃げずに戦う」拠点として、地域の安全を守る決意が示されている。

（８）ウクライナ戦争からの教訓

ウクライナ侵攻前の世論では、「戦う意思が低い」と見られていた可能性がある。これがロシアの侵攻判断に影響した可能性が指摘される。
各国の「戦う意思」比較では、日本は13.2%（※）と最低水準であった。
この事実は、他国からどのように見られるかという重要な問題を提起している。

※「あなたは国を守るために戦いますか」との問いに「戦います」と答えた各国民の割合

ベトナム	９６．１％
中　国	８８．６％
韓　国	６７．４％
イギリス	６４．５％
アメリカ	５９．６％
ドイツ	４４．８％
日　本	１３．２％

（９）結論：防衛新時代の本質

防衛新時代において最も重要なのは、軍事力の強化だけではなく国民の意志と信頼、地域と自衛隊の関係である。
特に**「地域と駐屯地の信頼関係」が防衛の基盤**であり、これが抑止力を支える根幹となる。
今後の日本の防衛は、国家レベルだけでなく、地域社会と一体となって構築していく必要がある。

４　所　感

本講演を通じて、日本を取り巻く安全保障環境が質的に大きく変化していることを強く実感した。
脅威は「能力」と「意志」によって高まり、中国・ロシア・北朝鮮が相互に連携する現状は、その複雑さと深刻さを示している。
特に中国は軍事にとどまらず、経済や技術、情報を含めた総合的な影響力を行使しており、従来とは異なる対応が求められている。

日本は防衛政策を転換し、「自ら守る力の強化」を進めているが、抑止力の本質は装備だけでなく、国民の「意志」と「信頼」にある点が重要である。
ウクライナの事例からも、国民意識が安全保障に影響を与えることは明らかであり、日本における意識の低さは課題といえる。
また、青森県のような地域が防衛上重要な役割を担っていることを改めて認識した。防衛は国だけでなく地域全体の課題であり、地域と自衛隊の信頼関係がその基盤であると感じた。
今後は、市民理解の促進に努めるとともに、地域と自衛隊の連携をより一層強化していく必要があると考える。